体育部会

県研究主題 児童一人ひとりが心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって自らの健康・体力つくりを考えて行動する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　　植田　基之（川崎地区）

＜研究主題＞ 体と心を育てる体育学習 ―“わかる”“できる”を通して、楽しさを深められる学習をめざして―

１　提案内容

『第４・５・６学年　陸上運動　～ハードル走～』

体育学習において、運動を楽しむ資質や能力を育て、体を動かすことに子どもたちが喜びを見出していくことが大切である。そのためには動き方が“わかる”こと、動きが“できる”ことを通して、子どもたちがいろいろな運動ができるようになり、達成感・充実感を味わえる学習を組み立てていく。

子どもたちが、体と心をはたらかせて主体的に運動に取り組む学習の形態をめあて学習（教師の支える指導や学習のねらいをもとに、子どもたちが自分の課題をもち、主体的に学習すること）として考え、体育学習の基盤ととらえ研究を進めていく。

（１）　重点研究課題「子どもたちがわかる、できるようになるための道すじを立てる」

体育学習においてPLAN（身に付ける内容、学習計画、指導方法などを明らかにする。）DO（計画したことを実践する。）CHECK（指導したことが身についているか評価する。）ACTION（評価したことをもとに指導内容を見直す。）の項目をもとに、授業を構築していくことで子どもたちのわかる・できる姿に近づいていけると考えた。また、子どもたちの活動を見守ること、教材・場を提示すること、言葉かけなど、子どもたちが「わかる」「できる」ために手だてのすべてを指導として捉え、子どもが「わかる」「できる」ようになるための指導内容、順序のすべてを明らかにしたものを学習の道すじとして捉える。

（２）　PLANの充実

①　身に付ける内容を明らかにする

ア　学習指導要領の内容把握、動きの分析

イ　いつどのように評価を行うか明らかにする

②　身に付ける方法を明らかにする

ア　教師の言葉かけ

イ　場づくり

２　協議内容

（１）　「動きのポイントをいつ、どのような順番で提示していくか」について

・ハードルを「同じ歩数」「遠くから踏み切る」「素早く着地する」の３つにしぼることで、子どもたちが効果的に練習に取り組み、技能のポイントを意識することにつながる。

・運動量を確保しながら子どもたちの気づきを大切にし、掲示物を利用し教師がまとめを行

う。

・ハードルの高さは、腰の高さを目安にし、スピードに乗りやすいように第１ハードルまでは、１０ｍ～１２ｍに設定することが適切である。

（２）　「子どもたちが気づく動きのポイント、子どもたちに伝える動きのポイントを吟味していくこと」について

・子どもたち自身で動きのポイントに気づいていけるような声かけや場の工夫が大切である。

・子どもたちの言葉を使いながら、指導の中で具現化していく。

（３）　新学習指導要領に沿った年間指導計画の作成について

・各運動領域の系統性をふまえて、指導計画を作成する必要がある。その中で小中連携での情報交換や教科担任制を実施している学校もある。

・学校規模、設備、行事などに応じて体育の時間を確実に確保していく。

３　指導助言

・川崎地区は、組織的な研究を行っており、授業に対しての検証、改善を積極的に取り組んでいる。

・わかる、できるための道すじとして、「同じ歩数」「遠くから踏み切る」「素早く着地する」の３つの動きのポイントを明確にすることは、子どもたちにとって効果的な練習である。

・教え込みの学習に陥らず、子どもたちの気づきを大切にした授業、めあてをもった授業など新学習指導要領に沿った授業展開が必要である。

提案２　　提案者　　嘉数　浩子（湘南三浦地区）

＜研究主題＞

児童一人ひとりが心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって自らの健康・体力作りを考えて行動する資質や能力の基礎を養う

―　一人ひとりが自分の役割を考えて運動を行い、

その楽しさや喜びを味わえる授業を目指して　―

１　提案内容

『第５学年　ボール運動　～タグラグビー～』

本単元を通して、ボール運動が苦手だと感じる児童でも、チーム内で役割を見つけ積極的に取り組み、仲間との関わりを深める中で、達成感やともにゲームを作る楽しさを感じてほしいと考える。

（１）　チーム人数

全員が動く必要があり、積極的に参加できる４、５人とした。チームは力の偏りが出ないこと、児童同士の人間関係を考慮し、教師側で決めた。

（２）　作戦カードと個人学習カード

チーム内でのイメージを共有する、自分の役割を明確化するための作戦カードと個人めあてや振り返りのできる学習カードの二種類を活用した。

（３）　学級独自のルール

練習を重ねる中で出てきた問題をルールづくりに生かし、学級独自のルールとして取り入れた。

（４）　兄弟チーム

２つのチームで練習を行い、試合では２チームの総合得点で競うように設定した。

（５）　攻撃・守備パターンの提示

教師側から「空いているスペースを使って攻める。」「２段階でディフェンスをする。」など、ある程度攻守の動きを提示した。動きの分かりやすい作戦を立てたチームの動きも紹介した。

２　協議内容

（１）　ボールがこわい児童に対してどういう手だて・声かけが有効であるか。

・タグラグビー用の楕円形のボールを購入したことで、興味をもち、触りたがった。

・投げる、取る、の練習を多く取り入れ、「仲間には強く投げないようにしよう。」とした。

（２）　学級のルール作り

・導入時は必要最低限のシンプルなルールで取り組み、学習を進める上で子どもの実態に即して、話し合いの中からルールを決めていった。

・学年間での「タグラグビー大会」を開催してもおもしろいが、学級独自のルールになっているとクラス間でずれが生じてしまうことがある。

例１　タグを取った人も取られた人も一度コートに出て、タグを付けられるまで入らない。

例２　全員得点で得点が２倍になる。

（３）　言語活動の充実

・人数を少なくしたことで、苦手な児童や字を書くことが好きな女子が積極的に参加できた。自分の考えた作戦が採用されることで喜ぶ児童もいた。

（４）　話し合いからできた作戦の種類にはどんなものがあったのか。

・児童はいろいろな作戦の名前を付けるのが楽しいようで作戦の種類は数多く出てきた。その中から学習を進めていく上で有効な作戦に自然と絞られていった様子が見られた。

３　指導助言

（１）　タグラグビーについて

・局面学習であり、シュートがないボール型ゲームである。どの児童にも得点の可能性があり、達成感をもたせられる。ボールを持たないときの動きを身に付けさせやすい。

（２）　チームゲームの視点

・チーム作り、ルール作り、場作り、審判、人数やコートの広さなどを決めていく上で大事なことは児童の実態に即すことである。

（３）　６年間を見通しての年間指導計画

・年間指導計画を立てている学校が多いので、それを計画通りに学校全体で取り組むことが必要である。

（４）　運動量を確保した言語活動の充実

・運動量を確保し、言語活動と両立する指導の工夫をしていく。まずは、単元や１時間の見通しをしっかりもち、授業を進めることが大切である。

（５）　学級経営とチームゲーム

・肯定的な人間関係をベースに一人ひとりが課題をはっきりもって取り組んでいることが望ましい。勝敗を大事にして、勝つための作戦や動きなどを意識させていく。

４　まとめ

（１）　新学習指導要領の改訂の趣旨や内容の理解

・豊かなスポーツライフを実現するために小学校体育ではそのための基礎をしっかりと身に付ける必要がある。

・運動の系統性を図り、２年間のまとまりとして運動を一層弾力的に取り上げることができるようにすること。

（２）　十分な指導計画づくりと実態を踏まえた指導内容

・６年間の見通しをも持った指導計画になっているかを今一度確認する。中学校との接続を考慮したものとなっているかを確認する。

・体育の授業が確実に体育の授業として実施されているかを確認する。

（３）　新しいキーワードに偏らない授業づくり

・体育における言語活動はこれまでも「学び方」との関連で重視してきたとおり、重要である。ただし、体育は運動しながら学ぶことが基本であるため、運動量の減少は避けたい。従って、言語活動は「量」ではなく「質」を向上させることが大切。

（４）　保健領域における新しい内容の確認

・学習指導要領解説の正しい理解をするために、解説に示されている「理解できるようにする」、「取り上げるようにする」、「触れるようにする」とした表現を読み解くことが大切。